

平成 2 8 年 6 月 9 日現在

機関番号：2 7 1 0 1

研究種目：若手研究(A)

研究期間：2013～2015

課題番号：2 5 7 0 4 0 0 6

研究課題名(和文)知的障害者表象に関する比較文学研究とデータベースの構築

研究課題名(英文)Construction of database and study of comparative literature on a representation of a person with mental retardation

研究代表者

河内 重雄(KOUCHI, SHIGEO)

北九州市立大学・文学部・准教授

研究者番号：1 0 5 8 1 5 3 0

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文):主として戦前の韓国の文芸雑誌を1ページ毎めくすることで、知的障害者が描かれている作品をリストアップした。3年間の調査で、戦前、戦後の約60もの文芸作品をデータベースに加えることができた。また、教育や医学、福祉の領域の、知的障害者観の形成に関わる著作等の調査・リストアップも、戦前を中心に行った。以上の調査を基に、戦前の日本の知的障害者の結婚をテーマとした文学作品2つと、韓国の作品2つとを比較研究した。

研究成果の概要(英文):A work that person with mental retardation is described has been pick out by turning the pages of such mainly of prewar South Korea literary magazines.We were able to add a literary works of approximately 60 of before the war and after the war to the database.And books and magazines related to the formation of person with intellectual disabilities view of education and medicine area of welfare were research and pick up at the center of the prewar.It was a comparative study of two literary works depicting the marriage in prewar Japan of people with intellectual disabilities and two South Korean literary works based on the above investigation.

研究分野：人文学

キーワード：知的障害 比較文学 日本近代文学

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は平成21年12月に、『知的障害者表象の文学的研究 知的障害者や人間はいかに語り得るか』というタイトルで博士論文を九州大学大学院に提出した。博士論文を執筆する上でデータベース「知的障害に関する記述を含む作品・事項一覧」を作成し、期間内であたうかぎり、知的障害者が描かれている文学作品を分析したところ、いくつかの文学作品が、現実的には疎外され続けている知的障害者に、人間としての豊かさをみたり、普遍性を帯びた存在として描いているという事実突き当たった。

近代以降、西洋の精神医学などが日本にもたらされ、明治20年代に「idiot」の翻訳語としての「白痴」という語が、義務教育の普及とともに実体性を次第にもつようになった。医学や教育、文学など、どのような領域においても、「白痴」について語ることは、直接的、間接的に人間とは何ぞやという問題と関わることになった。

そのようななかであって、医学や教育、政治などの領域では、戦前までは「白痴者」を非人間的な存在としてまなざしているのに対し、文学の領域では、現代まで一貫して「白痴者」に人間的な豊かさや普遍性をみているのである。

しかしながら、文学作品において知的障害者に人間的な豊かさが見出されるということは、知的障害者表象の一側面に過ぎないのではない。作成したデータベースは限られた期間と予算内でのものである。このデータベースが充実することで、知的障害者表象の多面性を明らかにすることができるのではない。

このような反省のもと、日本近・現代文学における知的障害者表象の通史的・体系的研究を進展させる上で、データベースを発展的に構築する必要があると考え、平成22年8月に採択された科学研究費補助金(研究活動スタート支援、研究課題「近・現代文学における知的障害者表象に関する基礎的研究」、平成24年3月31日まで)により、未調査の雑誌の調査等に取り組んだ。2年間の調査でデータベースは飛躍的に充実し、その調査結果に基づき、平成24年3月に著書『日本近・現代文学における知的障害者表象 私たちは人間をいかに語り得るか』を九州大学出版会より刊行した(平成23年度九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクトの種目「G タイプ」(図書等に対する出版助成)により刊行)。健常者から一方的に語られるだけの知的障害者像が、百年のサイクルで見ると、自らを語るという知的障害者像へと変化していったことが明らかとなり、知的障害者表象の別の側面を指摘することができた。また、刊行と同時にデータベースを九州大学出版会のHP上で一般公開、三ヶ月に一度くらいの頻度で現在も更新を続けている。

近年、グローバルがキーワードとなり、知的障害者問題も世界的な問題として捉えられるようになってきている。知的障害者関わる制度を外国の事例を参考に整えたり、知的障害者を描いた外国文学も多数翻訳・紹介されている。しかし、知的障害者の出てくる文学作品で日本語に翻訳されていないものも無数にあり、知的障害に関する制度や概念が異なる以上、文学作品における知的障害者表象も国によって違いがあると考えられる。比較文学研究により、日本文学における知的障害者表象の特徴についても、新たな側面が見えてくると予想される。そして韓国文学については、比較文学研究を進める準備がすでに十分に整っていた。これが研究開始当初の背景である。

2. 研究の目的

本研究の最終的な目的は、文学作品における知的障害者の語られ方を通史的に研究することで、近代以降の日本の知的障害者観・人間観を多角的に明らかにしつつ、その知的障害者表象の諸特徴を手掛かりに、これから知的障害者や人間、社会の諸制度をどのように考えることができるかを検討することである。知的障害者表象の特徴を多面的に明らかにする上で、比較文学は有効な研究方法と考える。

本研究ではまず、最初の1年間で、知的障害者が描かれている韓国の文学作品の調査を行う(文芸雑誌『現代文学』等の調査)。2年目に教育や医学、福祉等の領域の知的障害に関する著作を調査・リストアップすることで、比較文学研究に必要なデータベースを構築する。そしてそのデータベースを基に、3年目に、知的障害者を描いた韓国の主要な作品と、日本の文学作品とを比較・考察することで、日本文学における知的障害者表象の特徴を明らかにすることを、本研究の目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、日本と韓国の文学作品における知的障害者表象を比較研究する上で、必要不可欠なデータベースを構築することを、最初の2年間の目標としている。データベースの構築は、以下の2点を柱としている。

拙著執筆時に未調査である、九州大学が所蔵する韓国の文芸雑誌『国民文学』、『朝鮮及満州』、『朝鮮』、『三千里』などの調査、および、九州大学では調査をし得ない雑誌である『現代文学』、『創作と批評』などの調査を通じて、知的障害者が描かれている韓国の文学作品を調査・リストアップする。

韓国の国会図書館・国立中央図書館などで、知的障害言説の形成に関わる教育や医学、福祉等の著作を中心に調査を行う。

調査とはこの場合、「白痴」、「痴愚」、「魯鈍」、「精神薄弱」、「低能」、「知的障害」、「知恵遅れ」、「ダウン症」、「(精神遅滞)」

「（精神薄弱）」（知的発達障害）、「（知能発達障害）」、「（知能発育遅延）」、「天痴」などの知的障害を表す言葉を、文芸雑誌などを1ページ1ページめくって、拾っていく作業のことである。

雑誌の目次を見ただけではリストアップすることのできない作品は無数にあるため、このような地道な作業が不可欠である。知的障害者が描かれていることを確認した後に、複写し、分析を加えていく。

2年間の調査により構築したデータベースを基に、韓国における知的障害者概念が変化・多様化したと認められる時期を特定する。それら特定した時期における、概念の変化・多様化と関わる代表的な文学作品をピックアップし、同時期の日本の知的障害者を描いた作品群と比較・考察することで、日本文学における知的障害者表象に再検討を加える。以上が、本研究における研究の方法の概要である。

4. 研究成果

2年間の調査により、約60もの韓国の知的障害者が描かれている文学作品をリストアップすることができた。一例を挙げると、李光洙「少年の悲哀」（『青春』1917年6月）、石井楚江「小児よりも弱き」（『朝鮮及満州』1921年4月）、光永紫潮「朝鮮史劇 白昼の悪夢」（『朝鮮及満州』1924年6月）、李無影「吳道令」（『朝鮮文学』1933年10月）、金裕貞「こんな音楽会」（『中央』1936年4月）、李泰俊「夕陽」（『国民文学』1942年2月）、徐基源「暗射地図」（『現代文学』1956年11月）、朴榮濬「鐘閣」（『現代文学』1965年3月～12月）、金義貞「白い落照」（『韓国文学』1980年9月）などである（ハングルは日本語に訳してある）。特に戦前の雑誌、文学作品を重点的に調査した。比較文学研究のためのデータベースをある程度構築し得たと考えられる。

作成したデータベースに基づき、3年目に研究論文を2本執筆した。「小川未明「海蜚」論 李光洙「少年の悲哀」との比較より」（『九大日文』平成27年10月）と、「青木洪「ミインメヌリ」論 桂鎔黙「白痴アダダ」との比較より」（『語文研究』平成27年12月）の2つである。共に掲載半年後に、九州大学の機関リポジトリを通して、インターネット上で読むことが可能になる。

前者は小川未明「海蜚」（『赤い鳥』大正12年8月）と李光洙「少年の悲哀」（『青春』1917年6月）の比較研究。後者は青木洪「ミインメヌリ」（『中央公論』昭和17年2月）と桂鎔黙「白痴アダダ」（『朝鮮文壇』1935年9月）の比較研究である。「少年の悲哀」、「ミインメヌリ」、「白痴アダダ」は、戦前の朝鮮における、「白痴者」と結婚する健全者の不幸を描いた小説で、「海蜚」は、大正期日本の知的障害者と健全者の結婚を

描いた童話である。以下、比較により明らかになったことを要約的に述べる。

小川未明「海蜚」では、近代以降の知的障害言説と、結婚制度のリンクがテーマとなっている。知的障害者はまともな人間関係を築けない、社会にとって有害な存在だとする近代医学的な知的障害概念が一般化したことで、大正期の農村のように（結婚）生活がさほど複雑ではないようなところであっても、知的障害者であることは結婚相手として不適格だということを意味することとなった。近代化の思わぬ副産物と言うべき事態を描いている点に本作の個性がある。

「ミインメヌリ」の作品世界では、「男尊女卑」という近代の言葉で表されるような前近代的な価値観・精神と、古くからの婚姻制度とが相互補完的に結びついている。そのため、古臭い精神だけを新しくしようとしても、制度によって絡めとられてしまい、うまくいかない。新しい価値観・精神とそれにあった新制度、両方同時に変える必要のあることが示されている。夫に口答えしないよう、将来妻になる者とその家族に返しきれない恩・大金を与え（ミインメヌリという婚姻制度）、妻を鞭や斧で脅しつけ、妻に重労働を押しつけて自らは何もしない、前近代的な精神の象徴とも言える「白痴」の夫。男尊女卑だとして、妻を人間として扱うよう批判するだけでは何も変わらない。そのような新しい考え方にあった婚姻制度も、同時に築かれねばならないというメッセージが読み取れる。朝鮮の近代化がテーマである点や、「白痴者」が前近代的な精神を象徴している点で、「ミインメヌリ」と「白痴アダダ」は共通している。

韓国の作品との比較で気付いた点だが、戦前の日本の文学作品では、知的障害者の性的被害がテーマとなることはあっても、結婚がテーマとなることはほとんどない。逆に、戦前の朝鮮の文学で知的障害者の結婚がテーマとなることが珍しくないのは、韓国では知的障害者を収容する施設等がほとんどなかったことや、男子中心の結婚制度と関係しよう。収容施設については、1913年設置の朝鮮総督府医院・精神病室があるが、朝鮮人の「白痴者」にはほとんど利用されなかった。比較文学により、戦前の日本文学における新たな知的障害者表象の特徴を明らかにすることができたことが、本研究の成果である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3件）

河内重雄、青木洪「ミインメヌリ」論、語文研究、査読有、120号、2015、14 - 32

河内重雄、小川未明「海蜚」論、九大日文、査読有、26号、2015、67 - 77

河内重雄、坂口安吾「白痴」論、語文研究、
査読有、118号、2014、1-18

〔学会発表〕(計 1件)

河内重雄、坂口安吾「白痴」の一解釈、平
成26年度九州大学国語国文学会、単独発表、
2014年6月14日、九州大学(福岡県福岡市)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

九州大学出版会におけるホームページ
<http://kup.or.jp/booklist/hu/literature/1068.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

河内 重雄(KOUCHI SHIGEO)
北九州市立大学・文学部・准教授
研究者番号：10581530

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：